
ソラノカケラ

久保 徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソラノカケラ

【Nコード】

N1692A

【作者名】

久保 徹

【あらすじ】

優れた科学力を持った旧文明の【遺産】をめぐる二国間の戦い。主人公は連合国側の飛行小隊の一員として、この戦争に参加していきます

01 First-Contact「接触」

「調査隊から本部、周辺の調査は終了した。これより内部の調査に移る。」

『本部、了解』

世界地図の最北にある小さな島に、連合国の調査隊が派遣されている。

目的はこの島の地下にあるとされる【旧世代の遺産】の調査だ。

「内部に熱、電子反応なし。完全に停止しています。」

島の地上には唯一、古ぼけ蔦の絡まった地下への入口があるのみ。

他は草原が広がり樹木が乱立している。

「よし、入るぞ。」

自然溢れるこの島には不自然な機械的な扉。

扉を開けて中に入ると、先が見えないほど長く深い階段が続いていた。

「階段か。何もないと思うが、警戒しろ。」

調査隊はゆつくりと階段を降りていく。 しばらく降りると

更に扉が現れた。

扉を開けて中に入る。

「ここは…」

中は思いのほか広く、円状にモニターが並んでいる。
すると一人の兵士が何かに気付いた。

「隊長、奥に何かあります。」

「…なんだ、これは…」

部屋の奥にあったのは、見上げるほど巨大な四角い柱のような物体。

「これは何か、コンピューターのような物か？」

「それにしてもデカすぎですよ。」

「隊長！モニターがつー!!」

兵士の声に驚いて振り向くと、突然モニターが起動した。

画面には赤い文字で一言…

『ココカラタチサレ』

「これは…まさか俺達は…!!」

その日、世界のほとんどの国で地震が観測されていた。

「全滅！？島ごとだと!？」

連合国の調査隊本部はその報せに愕然とした。

「はい、衛星で確認しました!」

「馬鹿な…何があった…。【旧世代の遺産】とはなんなんだ…。」

02 Three-Years-Later「三年後」

調査隊全滅事件から三年。

あれから世界各地で【遺産】は発見され、調査研究が続けられていた。

「調査隊の事件を忘れたか！？【旧世代】は危険過ぎる！我々が触れてはいけないんだ！！」

「何を馬鹿な！あの力があれば世界は更に発展するぞ！」

遺産をめぐる今回の代表者会議は連合国と帝国の間で、何の進展もないままもうすぐ半年を迎えようとしていた。

（何が世界の発展だ…自国の軍事利用が目的だろう。）

両勢力の有力者が集まる会議も、これでは悪口を言い合う子供の喧嘩のようなものだった。

三年前の事件から現在まで同じような事件は起きていない。

（連合国空軍ブルーオーシャン基地）

太陽はすでに半分が水平線に沈み、空は炎のように赤く燃えている。そんな景色を見ながらハンガーの前で煙草を吸う青年がいる。

「ふー。」

白い煙を吹きながら深呼吸をする。

「おう、グリム。珍しいな、今日は一人か？」

「あ、リーベンハルト隊長。ミスキなら部屋に戻りましたよ。」

リーベンハルトも胸ポケットから煙草を取り出した。

ライターを出そうとするが見つからず、体中を探している。

見兼ねたグリムが自分のライターを差し出した。

「…ふー、わりいな。ミスキはまた自己分析か？」

「彼女は自分なりに上手くなるうとしてるんですよ。」

太陽は更に沈み、夕日は徐々にグラデーションを伴って夜の闇へと

変わっていく。

綺麗な夕日と海があり、観光で賑わっていたこの地方も、会議で帝国との溝が深まると観光は禁止された。

「お前等も来週からは正隊員か。おれからすりやまだまだ危なっかしいけどな。」

「大丈夫ですよ。」

グリムは笑いながら答える。

煙草を吸い終えた頃には辺りはすっかり暗くなっていた。

翌日――

「いよいよ…この日が来たか。」

窓から見える空は、蒼くどこまでも広がっている。

彼はこれからこの空を飛ぶことになる。

「行くか。」

顔を洗い服を着替えると、少しして彼は静かに覚悟し、部屋をあとにした。

訓練生達は全員ブリーフィングルームに集まっていた。

席についている彼らの表情は一樣に緊張し、部屋は人がいるとは思えないほど静寂に包まれている。

そこヘリーベンハルトが入ってきた。

その途端に彼らは一斉に立ち上がり敬礼をした。リーベンハルトも軽く敬礼を返す。

「…よし、全員いるな」リーベンハルトはモニターを点け、説明を始めた。

「今日は訓練課程終了試験だ。この試験をパスすればお前達は正式に隊員として登録される。」モニターには基地周辺の地図が表示された。

「この試験は小隊長含む四人編成を四チームで行なう。終了試験専用の機体を使った実戦形式だ。」

「実戦ですか？」

ふとグリムが聞いた。

「形式だつて言っただろ。ほれ、さつさと行け行け！」

リーベンハルトはグリムの背中をバシッと叩いた。

「イタッ」

グリムは叩かれた背中に手を当てながら格納庫へ向かった。

訓練生達は二手に別れ、グリム達は第二格

納庫へ向かった。

格納庫では試験用の機体が準備されていた。

「こいつが終了試験用特殊装備戦闘機、通称^{ガーベラ}」

ガーベラには実弾は装備されていない。

専用のスコープを使用することで実際に空を飛びながら擬似的に空戦を体験できる。

「じゃあ各自準備しろ！」

リーベンハルトの号令で訓練生達は準備に向かった。

「グリム！」

グリムは声のした方に振り向いた。

「お、ミズキか。」

声の主は同じ訓練生のミズキだった。

彼女も終了試験に参加する。

「私も同じ小隊なんですよ。よろしくおねがいします。」

そう言つてミズキは軽く頭を下げた。

動きに合わせて金髪の髪がふわりとなびく。

「そうなのか、よろしくな。」

彼女は年下なわけではないが、父親が厳しかった為言葉遣いは誰にも丁寧だ。

頭を上げるとニコリと笑い、自分の機体の方に走って行った。

グリムも機体に取り込んだ。

準備を終えてリーベンハルトを先頭に各機、

滑走路に出てきた。

『こちら管制塔、α小隊発進どうぞ。』

「α小隊、発進する！」

爆音、爆風と共に彼らのガーベラが空へ上がっていく。

空は今日も晴天。

遠くに雲が見えていた。

03 Quiet - Invader「静かな侵略者」

「α小隊、全機離陸完了。」

『β小隊、離陸完了。』二小隊、全八機のガーベラが綺麗な編隊を組んで飛んでいる。

「まもなく小隊ごとに二手に別れて折り返し地点に向かう。到着後、予定地点に折り返し、試験開始だ。」

その後二手に別れ、折り返し地点で折り返した。

「さて、もうすぐ始まるがお前等大丈夫だろうな？おれは見てるだけだぞ？」

「全部叩き落としてやりますよ！」

仲間の一人が言うとりーベンハルトは

「そうか。」

と笑いながら言った。グリムとミズキもそのつもりだ。

1400時――

「お、来たな。」

試験開始予定時刻、りーベンハルト達の前方に相手となるβ小隊が見えてきた。

『こちら、β小隊。いつでもいいぞ。』

「よし、時間もぴったりだ！試験開始だ！行つてこい！！」

そう言うとりーベンハルトは機体をロールさせ、離れていった。

グリム達はそのまま加速し、相手との距離を詰めていく。

ミサイルの有効射程に入った。

「！！！！」

その途端に相手のミサイルにロックされた。

少し遅れてグリムも相手を捉えミサイル発射と同時に、回避行動に入った。

相手のミサイルはグリム機のスレスレを通り抜けていった。

「……っ！！ふう！危なかった！」

「グリム！後ろです！」ミサイルをギリギリのところ回避し、ホッとしたのもつかの間、別の機体がグリム機の後ろについた。

「後ろにつかれた！」

「今行きます！」

すかさずミズキが援護に向かう。

「これで！」

ミズキはミサイルを発射した。

スコープの中で、ミサイルは白い尾を引きながら真っすぐ飛び、小隊の機体に命中した。

『DESTRUCTION！』

「くそっ！やられた！」

撃墜された機体は試験空域を離れ、リーベンハルト達と合流する。

「ふう…ありがとう、ミズキ。」

「いえいえ。」

「負けてらんないな！」

グリム達は体勢を立て直し、残りの相手に向かっていった。

ブルーオーシャン基地―『機動隊戦術室』

「クラックス室長、終了試験開始しました。」

「そうか、始まったか。」

機動隊戦術室はこの基地の作戦立案、指揮、データ管理などを担当し、事実上の最高機関だ。

「何人受かりますかね？」

「今回の新人は優秀らしいからな。どうなるかな？」

「あ、さっそく一機リタイア。」

その時、レーダーに反応があった。

反応は全部で六。

その影は真っすぐに基地に向かっている。

「室長、これは…」

「…不明機に警告、リーベンハルト達にも伝える。それとこちらも発進準備だ。」

基地内に警報が鳴り響く。

『現在当基地に国籍不明機が多数接近中。搭乗要員は至急発進準備。』

基地内は隊員達が慌ただしく動きだし、緊張感が増していく。

不明機接近の知らせは、リーベンハルト達

にも伝えられた。

「あん？不明機？どうゆうことだ、そりゃ？」

『わからん。とにかくもうすぐそちのレーダーにも入るぞ。』

不明機は警告を無視し、尚も基地に接近してくる。

『こちらからも迎撃部隊を出した。試験は中止して、帰投しろ。』

「……わかったよ。おい！お前等聞いてたな？帰るぞ！」

「試験はどうなるんですか？」

「おれが決めることじゃない。いいから帰るぞ！」

彼らは試験を切り上げ、基地へ帰ろうとしていた。

すると別の空域で試験中だった小隊から通信が入った。

『こちらY小隊！！現在国籍不明機に攻撃を受けている！！』

「！！！！」

『すでにΩ小隊は全滅！救援はまだか！？不明機は見たこともない

……！！！！』

ここで通信は途切れた。彼らの全滅は機戦室でも確認されていた。

そしてリーベンハルト達のレーダーに敵の反応が現れた。「あれか

……早いな。」

不明機は徐々に距離をつめている。

「おら、お前等！もつと飛ばせ！」

「これが限界です！」

試験用の特別機である。

その為スピードはそれほど早くない。このままでは追い付かれるのも時間の問題だった。

「基地からの部隊はまだか……！」

ついに一番後ろを飛んでいた訓練生の機体が敵の有効射程に入った。

「ロックされた！」

「真っすぐ飛ぶなよ！」

後ろからは敵の発射したミサイルが迫ってくる。

「旋回しろ！！」

「だ、駄目です！振り切れな……！」

次の瞬間、彼の機体はグリム達のすぐ後ろで爆発した。

飛散した破片が機体に当たり、カンカンと音がし。

「……くそっ！」

破壊された機体は、海に落ち小さく水柱をたてる。

尚も敵は接近する。

グリム達はただ逃げることしか出来ない。

しかしその矛先はグリムへと向けられた。

「今度はこっちか！」

今度はグリム機がロックされ、警報音が鳴り響く。

すると焦るグリムの横を何か猛スピードですれ違った。

後方で爆発音がした。

『こちらブルーオーシャン基地第四機動隊だ！あとは引き受ける！

早く離脱しろ！』

「助かった……」

そのまますれ違つと、後ろでは戦闘が始まった。グリム達は無事基地に戻ってきた。

その後、第四機動隊も全機無事帰還した。

彼らの話によると、不明機は見たこのない機体だったがよく見ると帝国のマークが入っていたという。

この戦闘で訓練生、教官合わせて九名が死亡。

帝国機はしばらく後、撤退して行つたと言う。

04 To・The・Sky・Of・One・s・Home「故郷の空へ」

帝国機との戦闘後、ブルーオーシャン基地では侵入経路や、撤退先の特定がされていた。

「室長、結果ができました。」

「うむ。」

「撤退した帝国機ですが、帝国領に入っただけでしばらくした後、突然リーダーから消えました。侵入経路はおそらく低空で侵入してきた為、センサーが反応しなかったようです。」

クラックスは顎に手を当てながら報告を聞いている。

手を下ろし目を瞑ると、しばらく考え込んだ。

「…やはり、帝国なのか。」

「室長っ!!」

するとそこへ部下の一人が息を切らせながら慌てて入ってきた。

「なんだ、どうした?」

「これを…!!」

部下は自分の席につくとモニターにテレビの映像を出した。

『先日、突如我が帝国空軍レオール基地を襲った国籍不明の戦闘機部隊は、連合軍ブルーオーシャン基地から発進したものであることがわかりました。』

映像は帝国国営テレビのニュースだった。

ニュースは帝国軍基地が連合軍部隊に襲撃されたという。

さらにその発生時刻は訓練生が襲われたのと同時刻だった。

『これは明らかに侵略行為であり……』

クラックス達はそのニュースを見ながら茫然としている。

全員がモニターを見て固まってしまっている。

「これは…どうゆうことだ…」

「映像に合成の形跡は見られません…実際の映像です。」

するとまたしても、部屋の外から走ってくる音が聞こえてきた。

ドアが開き、入ってきたのはリーベンハルトだった。

「おい、クラックス！あの放送はなんだ！？」

「落ち着けリーベンハルト。我々も今その話をしていたんだ」
クラックスはモニターを指差しながら言った。

ニユースはまだ襲撃の映像を映している。

「どこの馬鹿がやったんだ？」

「それより同時刻とゆうのが怪しい。その時間に出撃していた連合の部隊はない」

二人ともモニターを見ながら考え込む。しばらくするとリーベンハルトが口を開いた。

「クラックス」

「ん？」

「お前に任せる！」

そう言うときクラックスの肩を軽く叩き、出ていった。

「……一体何しに来たんだか」

クラックスはため息混じりにそう言った。

翌日――

『先日の連合による攻撃は、卑劣で許しがたいものであり、さらに【遺産】を自分達のものにしようている』

帝国から世界中に向けて、全てのメディアを使って放送がされた。

その内容は……

『我々はこのまま、連合に蹂躪されるつもりはない！よって我々は連合に対して宣戦を布告する』帝国の宣戦布告……

これにより二国間の確執は一気に武力衝突に発展した。

連合国の最東端基地であり、周りを観光名所に囲まれたブルーオーシャン基地は、帝国に対する最前線基地となった。

ブルーオーシャン基地――ブリーフィング

ルーム

今ブリーフィングルームには訓練生

が全員集められていた。

訓練生達の前には機動隊大隊長となったりリーベンハルトがいた。

「いろいろと聞きたいことはあるだろうが、戦争が始まった以上お前等もスクランブル要員だ」

終了試験から数日、グリム達は結果の合否もないまま、帝国との戦争に駆り出されていく。

「それとこれからお前等の機体は《シルヴァーナ》になる」

グリムがふと横を見るとミズキが不安そうな顔をしていた。膝の上に置かれた手が、小さく震えている。

「それじゃ、解散」

みんなが部屋を出ていく中、ミズキはなかなか立ち上がろうとしない。

「ミズキ」

「あ！グリム」

グリムが声をかけると、ミズキは少し驚いたように答えた。

「終わったよ」

「え、あ、はい」

ミズキは辺りをキョロキョロとしている。

それを見てグリムは少し笑いながら隣に座った。

「やっぱり、怖い？」

少し黙った後に……

「軍に入るって決めた時にこうなる事も覚悟してました。でもいざとなると……」

「おれだって怖いさ」

うつむいていたミズキは顔を上げて、グリムを見た。

「これから人を殺すかもしれないって思うとね。でもそうしないと守れない、大切な人とか場所とか」

「グリム……」

「無理しなくなたっていいんだよ。仲間だっているんだから」

グリムは笑ってそう言った。

「はい」

ミズキ笑って答えた。

その時基地内に警報音が鳴り響いた。

『中央より入電！セントマリー軍港に帝国機が出現、攻撃を受けている』ミズキはそれを聞いた途端跳ねるように立ち上がった。

「そんな……セントマリーが」

セントマリーは軍事施設が多いため真っ先に狙われたのだろう。

そこはミズキの故郷でもあった。

「ミズキ行こう」

「……はい」

ミズキは小さく頷きグリムの後に付いて部屋を出た。

この戦いが公式では初めての両軍激突の場となるのだった

この時基地は襲撃準備を急ピッチで進めていた。

「リーベンハルト！お前は大隊長だぞ、ノコノコ出ていくな！」

準備をしていたリーベンハルトの所にクラックスが駆け寄ってきた。

「何言つてんだクラックス。おれにデスクワークなんか似合わねえよ」

ハシゴを登り操縦席についた。

「そもそもおれが簡単にやられると思ってんのか？わかつたらさっさと退け」

リーベンハルトは自信満々に言い返した。

「……死ぬなよ」

「当たり前だ」

リーベンハルトはそう言つて機体をゆっくり滑走路に向かわせる。

『リーベンハルト隊、発進どうぞ』

「リーベンハルト隊、発進するぞ！」

徐々に出力を上げ、加速していく。

グリムとミズキもそれに続く。

地面から浮き上がるとさらにスピードを上げ、あっという間に見えるなくなつた。

「すごいな、やっぱガーベラとは違う」

「試験用と一緒にするな。そんなこと言つてる暇あつたらちゃんとついて来い、飛ばすぞ」

途中、他の基地からの援軍と合流しセントマリーへ飛んだ

「見えてきた」

彼らの正面にセントマリー軍港が見えてきた。

軍港に近づくにつれて、その被害の大きさが明らかになっていく。

軍の施設はガレキの山となり海には破壊された艦船や戦闘機の残骸

が浮いている。

「港が……」

ミズキはいたる所から黒煙を上げ、崩れる軍港を見下ろしながら悲しげな表情を見せる。

「よそ見してる暇はないぞ。敵さんが来た」

正面から敵機が迫る。

数は三。

リーベンハルトが挨拶代わりと機銃をばらまく。

これは牽制攻撃であるが当たり所が悪かったのか徐々に失速し落下しながら爆発した。

「お、もうけ」

今度は敵機が機銃を撃ってきた。

リーベンハルト達はこれをかわし、敵機とすれ違う。

「いいかお前等、ここからが命懸けだ！絶対にバラけるな、今は生き残ることを考えろ！」

目の前で爆発ともに消えていった命。

グリム達はこれが戦争であることを実感する。

「もらった！」

発射ボタンを押すと、ミサイルは飛びかう戦闘機を擦り抜け目標に命中する。

飛び散った破片をかわし次の敵機に目を向ける。

グリムは敵機をためらい無く攻撃している自分に恐怖を覚えながらも、

（これは戦争だ。やらなければやられる）

そう言い聞かせていた。

「お前等生きてるか？」

「はい、大丈夫です」

ミズキはそう答えるが確実に疲労している。

そこへ空中官制機から通信が入った。

『敵増援接近中。数三、ライブラリ照合、ヴァルキリーです』

「《黒の女神》か」

リーベンハルトがぼつりと呟く。

《黒の女神》――

帝国空軍のEース部隊としてその名は連合国軍兵士にも知れ渡っている。『久しぶりだな、リーベンハルト』

聞き慣れない女の声は近づいてくる黒い機体からだった。

「シャロン……」

リーベンハルトはその声に答える。

「お前が出てきたとゆうことは、帝国も本気ってわけか」

黒と白の機体がすれ違っていく。

『安心しろ、今日は様子見だ』

シャロンは冷たく言い放つ。

まるで勝利を確信しているかのように。

「そりやどうも」

シャロンは鼻で笑い通信を切った。

そして散っていた部下達を集め、飛び去っていった。

（あれが黒の女神……）グリム達は接触した僅かな時間で、彼女等との力の差を感じていた。

その後、セントマリー軍港における戦いは

グリム達援軍の力もあり、なんとか押し返すことに成功した。

しかし味方の被害は勝利と呼ぶには程遠いものだった。

「停泊中だった三隻の空母のうち、《ジャクリン》《ヴァネッサ

》が轟沈。残る《エリザベス》も被害は小さくありません」

「三隻全て駄目か」

戦術室は重たい空気に包まれた。

「脱出した乗員の話では黒い機体にやられたと」

「隊長、黒の女神って一体……」

グリムの問いにリーベンハルトは背中を向けたまま答えた。

「黒の女神ってのは、帝国の新鋭機ヴァルキリーと女だけで構成さ

れるエース部隊だ」

そう言うリーベンハルトの背中を見ながら、グリムはただならぬ気配を感じていた。

「今のお前等じゃ、やられるだけだ」

その言葉に息を飲んだ。

初陣を生き残ったことでついていた自信もグラグラと揺れてしまい
そうなほどに。

帝国首都、大總統

府——靴音を響かせながら一人の女性が廊下を歩いている。

そして豪華に飾られた扉の前で立ち止まった。

「大總統、シャロン大佐です」

「入れ」

シャロンはゆっくり扉を開き、中に入った。

中には大きなテーブルと大きなイス、そしてそこに座る一人の男。

「お呼びでしょうか、シュナイダー大總統」

シャロンは軽く頭を下げる。

「シャロンよ、連合はどうだった？」

「今は大きな驚異ではありません。ただ……」

「ただ？」

「リーベンハルトがいました」

シュナイダーは小さく笑う。

「リーベンハルトか、懐かしい名だな」

シュナイダーは思い出すように目をつむった。

手に持ったグラスを置くと、立ち上がり窓から外を眺めている。

「【資産】の調査も間もなく終わり、次の段階に入ろうとしている。

お前には引き続き連合の気を引いてもらおうぞ」

「はっ」

06 Escape・From・Father「父からの逃亡」

《黒の女神》との遭遇から二日後――

リーベンハルト隊は帝国との軍事境界線付近まで哨戒任務に出ていた。

「哨戒任務なんてつまんねえなあ」

彼は気だるそうにそう言った。

「ケリイ、そんなこと言わないでください」

「へいへい」

セントマリーでの戦闘のあとブルーオーシャン基地では部隊の再編成が行なわれ、再び四機編成になった。

ケリイは再編成によって新たにリーベンハルト隊に編入された。

グリム達とは同期である

「隊長とグリムは大丈夫なのか？」

「あの二人は大丈夫ですよ」

グリム達は二人から三百キロ離れた空を飛んでいた。

『心配してる暇があったらしっかり見てろ』

リーベンハルトから通信だった。

『そっち何かあった？』

「何もなくてあくびが出そうだぞ」

「あ、ちよつと待ってください」

ミズキが何かに気付いてリーダーを見ると、一つの機影の後方からさらに二つ、後を追うようについてきている。

「敵か!？」

ケリイが飛び付いた。

「識別はヴァルキリーが一つ、残りはミネルバです。しかしヴァルキリーから救難信号が出ています」

「どうゆうことだ？」

ケリイが首をかしげる。『しばらく様子を見たほうがよくないか？』

『グリムの言う通りだ。二人はレーダーから目を離すな、おれ達もすぐにそっちに向かう』

通信を切るとグリム達はすぐにミズキたちの所に向かった。

ミズキとケリイはゆっくり敵機に近づいていく。

「見えた」

肉眼で見える距離まで近づいた。

「あれは……」

よく見てみると先行するヴァルキリーは後方のミネルバから攻撃を受けている。

「どうする？」

「救難信号は本当みたいです。とにかくミネルバは撃退しましょう」

「よっしゃ！」

ケリイは一気に加速し接近。

ヴァルキリーとミネルバの間に割り込むように機銃を撃つ。

そのまま前を横切り、ミネルバの後ろを狙う。

「逃がすか！墜ちろ！」

放たれたミサイルが恐怖とともに飛んでいく。

ミサイルは右翼に命中。バランスを崩し水面に激突、爆発した。

「よしっ！」

一機を撃墜し

「次だ！」

と残りの一機に目をやると、ケリイのすぐ横をミサイルが飛び抜けて行った。

そのミサイルは残りの一機を撃墜した。

「危ねえな、おい！」

「はは、ごめんなさい」

「笑えねえ！」

ミサイルはミズキが撃ったものだった。

ちょうどその頃、こちらに向かっていたグリム達が到着した。

「おい、大丈夫か？」

二人は素早く機体を横に付けた

「ヴァルキリーは？」

「上です」

そう言われて見上げると太陽と重なってヴァルキリーが飛んでいた。

「上空の機体、所属と名前を答えろ」

『私はカレン、帝国大總統シュナイダーの娘です』

リーベンハルトの問いにすぐに答えたヴァルキリーのパイロットは大總統の娘と名乗った。

『助けて頂いてありがとうございます』

「大總統の娘……？」

「嘘にしても大胆な奴だな」

「隊長、どうします？」

「……連れて行くぞ、何か情報を持っているかもしれん」

「了解」

ヴァルキリーを囲むように隊列を組み、基地へと戻って行った。

カレンはクラックスの早速取り調べを受ける。

彼女の乗ってきたヴァルキリーは基地の格納庫に置かれている。

「ようするに父親のやり方に納得できず逃げてきたと」

「はい」

「乗ってきた機体はヴァルキリーだな？」

「はい、あれは私専用ですから起動するには私の声紋が必要です」

敵国の基地で敵兵に囲まれながらも、彼女は恐れる様子もなく、淡々と答えていく。

（確かにおれ達がいくらやっても起動しません）機体を調べようとした整備兵が耳打ちする。

それを聞いてさらに質問する。

「何故そのようなロックをかけている？」

「秘密が、あるんです」

「どんな？」

カレンは少し黙った後、ゆっくり口を開いた。

「帝国は連合が思っている以上に【遺産】について調査は進んでいます」

彼女はさらに話を続けていく

「調査を進めるうちに、戦争の勝敗を決めてしまつようなデータを発見しました」

「データ？」

「ビーム兵器のデータです。私のヴァルキリーにはそのデータを基に試作されたビーム兵器が装備されています」

この話を聞いてクラックス達は驚いた。

連合がビーム兵器の研究を始めたのは最近の話である

「じゃあ最後に」

クラックスはじつとカレンの目を見て言った。

「君がスパイである可能性は？」

カレンはゆっくり目を閉じる

「もっともな話ですね。ですから信じていただく為に私のヴァルキリーのデータを差し上げます」クラックス達は格納庫に移動し、本当に起動するか確かめることにした。

カレンがコクピットに乗り込み、起動させる。

『起動コードヲ入力シテ下サイ』

「システム起動開始」

『……声紋確認、システム起動シマス』

すると今までピクリともしなかった機体が突然動きだした

「う、動いた」

『全システム正常ニ起動シマシタ』

「これでいいですか？」

カレンはニコリと笑って言った

「まあとりあえずは」

しかし完全に信用されていないカレンはク
ラックスの監視下に置かれた。
その翌日、けたたましい警報音が響き渡る。

「クラックスさん！私にも行かせてください！」

そう言って飛び出そうとするカレンをクラックスは腕を掴み引き止めた。

「君はかりにも敵国の人間だ、行かせるわけにはいかない」

「っ……」

カレンは振り切ろうとした手の力を緩めた。

帝国軍は軍事境界線を越えて連合国側に侵

入してきた。

連合軍もブルーオーシャン基地から部隊を出し、迎撃する。

「隊長、敵はやはり……」

グリムは不安げに言った

「嬢ちゃんだろうな」

リーベンハルトは冷静に答え……

「基地をヴァルキリーもろとも破壊する」

「場合によっちゃあいつも……かもな」

ミズキとケリイも続く

「どっちにしる基地をやらせるわけにはいかないんだ」

「だよなあ……」

「十二時の方角に敵影多数確認」

「下にもいるぞ」

帝国はついに最前線であるブルーオーシャン基地に攻撃を仕掛けてきた。敵部隊は航空戦力に加え数隻の戦闘艦の姿もあった。

「すごい数です」

ミズキが驚くのも無理はない。

リーダーの上半分は敵の反応でほとんど埋まっている。

「ビビってんじゃないやねえ！数は負けてねえんだ、あとは腕でなんとか

しろ」

大部隊の接近にともないクラックスは中央に援軍の要請をしていた。

「各機へ、攻撃を開始しろ、一つも後ろへ通すなよ！」

「了解、攻撃開始」

『こちらスワロー中隊、下からの対空放火

が激しい！』

『スワロー5がやられたぞ！』

空はまさに混戦状態になっていた。

そんな中、リーベンハルト小隊も必死に戦った。

「くそっ敵の数が多い」

「上はミサイル、下は対空放火かよ」

彼らの善戦もむなしく、徐々に帝国軍が数で有利に立ち始める。

基地で帰りを待つクラックスは現場から逐

一入る苦戦の知らせに、不安と焦りを募らせていた。

「他に出れる機体は無いのか！？」

部下に叫ぶも、返ってくるのは

「整備が終わってません！」

の一言のみ。そんな彼は気付いていなかった。

さつきまで横にいた少女が消えていたことに

「グリム！後ろに来てろぞ！」

その混戦ぶりに気を取られている隙に、グリムの後ろに敵機が迫って来ていた。

グリムは急旋回し振り切ろうとする。

「駄目だ！振り切れそうにない！」

敵機は振り切られることなく後をついてくる。

グリム機の警報が小刻みに鳴りだし、ロックされたことを知らせる。

「ロックされた……！」今にもミサイルが発射されようとしている

（ここまでか……）

グリムが覚悟した次の瞬間――

一筋の赤い光が二機の敵機を貫いた
機体には穴があき、赤々と焼けている

爆発の向こうに見えてきたのは見覚えのある黒い機体だった

「あれは……」

「グリムさん！大丈夫ですか！？」

無線から聞こえてきたカレンの声は少し震えていた

カレンはそのままグリムの横についた

「カレン、なんでここに……？」

横にいるヴァルキリーのコクピットを見ると確かにカレンが乗っていた

「自分だけ何もしないのは嫌なんです」

カレンはギョツと操縦桿を握った

操縦の訓練は受けていたが、実戦は初めてだったのだ

「隊長……」

「嬢ちゃんもそれなりに覚悟してんだ、いいじゃねえか」

リーベンハルトはあっさりと答えた

そして無線のスイッチを切り替え基地に繋いだ

「リーベンハルトだ。今からこの嬢ちゃんを、うちの五番機として
編入する」

『リーベンハルト！ちよつと待て……』

基地にこの事を伝えると、クラックスの話を聞かずに通信を切った
隊長、いいんすか？」

すかさずケリイが聞いてきた

「いいんだよ。なんならケリイ、お前が嬢ちゃんについててやれ」
「えー！？」

ケリイは眉をひそめてあからさまに嫌な顔をする

彼は戦争が始まってからは、空戦のスリルを楽しむようになって
いた

しかしカレンについては楽しむ余裕はなくなってしまう
「ケリイさん、よろしく願います」

「しょうがねえな、遅れんなよ！」

カレン機の登場によって、劣勢だった連合は徐々に逆転していった
「もう少しだ」

一瞬感じた勝利への期待は、直後に入った通信がかき消してしま
った

『戦闘空域に高速で接近する物体あり、数四、黒の女神です！』

「ちっ！こんな時に」

女神達の実力を知る連合の兵士達からは、すくなくとも希望は消
えた

だがそんな中、カレンは違った

「彼女達の狙いは、私なんですよね」

カレンは近付いてくる女神達を見つめながら静かに言った

「おれは隊長にお前を任されたんだ、お前は後ろに付いてくればい
い」

「でも私は……」

「守ってやるって言ってんだから言う通りにしてろ！」

「……はい」

連合との開戦を決めた父親を、止められ

なかった自分は、今や祖国から命を狙われている

思いを同じくし、逃亡を手助けしてくれた者達も捕まってしまう、
生きてはいないだろう

（守ってやる）

孤立無援となったカレンにとって、その

力強い言葉は不安を取り除くのに十分だった

08 Invisible・Menace「見えない脅威」

『姫、悪ふざけはここまでです』

《黒の女神》隊長シャロンは、まるで保護者のように語りかける

「私は戻らない、父を止めなければならないから」

だかカレンはそれを拒否し、同時に誓った戦争を終わらせる為に自らも戦うことを

『……おとなしく従わない場合は、機密を守るため撃墜も許可されています』

「私はこんな所で死ぬ気はありません」

父親は、娘の自分が死んでも構わないと思っていることを確信した

だが覚悟したカレンの心は揺らがない

「カレン」

「大丈夫ですよ」

「なら敬語はやめろ、どうもやりづらい」

そのケリイらしい言葉に、カレンは

「うん」

と少し笑いながら言った

『ならばしかたない、反逆者として処分する！』

「隊長！」

「わかってる！すぐに行く！」

「二人共、おれ達が行くまで近付くな！」

離れていたグリム、リーベンハルト、ミズキの三人は、女神接近の知らせを受けてケリイとカレンのもとへ急行する

ケリイ達は会敵しないよう女神から逃げながら時間をかせぐ
しかしスピードで勝るヴァルキリーが差を詰める

「やっぱあっちの方が早えな」

「ケリイ！」

「おれは大丈夫だから、先行け！」

ケリイ機のコクピットに警報音が小刻み
になりだした

敵が近付くほど、その間隔は短くなっていく

「うおっ！」

敵の放った機銃がケリイ機の左翼をかす
めた

とつさに機体を右に振り、致命傷をさける

「くそっ！隊長達はまだか！？」

ケリイは珍しく弱気になっていた

それほど機体の性能差は大きなものだった

「ケリイ！おまたせ！」

「グリム！てめえ遅せえぞ！」

その時、ようやくグリム達が追い付き合
流した「全機反転！女神にたっぷりお礼をしてやれ！」

リーベンハルトの号令で一気に反撃に転
じる

五対四、数では勝っている

『リーベンハルト、生意気な！一機残らず
叩き落とせ！』

彼らは両翼の端から細く白線を引きなが
ら、激しい空戦を繰り広げる

「すごい…女神と互角に戦ってる」

他の連合軍兵士の間から驚きの声があがる
後ろを取られては他の仲間が取り返す

息の詰まる戦いがしばらく続いた後、ついに動きを見せた

『機体が保てません！脱出します！』

激しい空戦の中、ついにグリムが女神の
一機にミサイルを命中させた

「グリム、すごい！」

「ざまあみる！」

煙をあげながら落ちていくヴァルキリー
を見下ろしながら、仲間達が歓声をあげる

「まだまだ、あと三機いるんだ」

当の本人はそれでも冷静に次の標的を見
据えていた

『おのれ！まだこれからだ！』

『隊長！本国から緊急通信です！今すぐ帰投するようにと』

『……本国に直接攻撃だと！？被害は？』

『詳しいことはまだわかりません』

味方を一機落とされたうえに、敵に背を
向けて逃げるなど出来るはずがない

だが本国が攻撃されたとあってはそうはいかなかった

『リーベンハルト、この借りは必ず返す！』

「なんとかなっ たな」

去っていく女神達を見ながらリーベンハ
ルトが言った

その後女神の撤退を期に、帝国の部隊も撤退していった

『こちら沿岸守備隊、敵軍が撤退していく！空軍の働きに感謝する』

海には敵味方両方の戦闘機、艦船の残骸が漂っている

なんとか勝利したものの味方の被害も予想以上だった

グリム達が基地

に戻ると、基地内は騒然としていた

不思議に思った彼らはそのまま戦術室に駆け込んだ

「クラックス！なんかあったのか？」

戦術室も同じように慌ただしく、スタッ

フがバタバタと走り回っている

「リーベンハルトか……詳しいことは調査中なんだが……」

「なんだよ？」

クラックスは静かに話始めた

「首都が直接攻撃を受けた」

「首都が！？」

全員驚いてしばらく黙ってしまった

するとミズキが思い出したように言った

「そういえば女神達が撤退するときもそんなことを……」

「ああ確かに」

「じゃああの攻撃は帝国の仕業じゃない？」

国中に張り巡らされたレーダー網は、いかに低空を飛ぶ巡行ミサイルでも発見し、ほぼ百パーセント迎撃可能となっている

つまり、ミサイルによる首都攻撃は事実上不可能なのだ

この時すでに彼

らの足の下では、《力》が目覚めていた――

09 Footsteps - Of - Conspiracy「陰謀の足音」

首都直接攻撃から二日後、突然の攻撃に混乱していた首都も、徐々に落ち着きを取り戻していた。目撃者の話では、空が明るくなり光が降ってきたと言う。

「第三者からの攻撃か？」

「あれほどのレーザー兵器を開発したとは聞いてないぞ」

「これは明らかに敵対行為だ！二国を亡きものにしようとしている者がいる！」

国の議会は、攻撃が誰からなのか特定しようとしていた。

そんな中最前線の彼らは――

「ふー」

「ちよつとケリイ、煙草くさい」

「なんだカレン、お前吸わないのか？」

「私はまだ未成年なんだから」

そう言うカレンにケリイは

「すまん、すまん」

と言いながら、フーと煙を吹く

カレンは煙そうに咳き込んでいる

「あの二人って、いつの間にあんな仲良くなつたんだ？」

「この前帰って来てからですね。何かあったんでしょうか？」

グリムとミズキは二人のやりとりを少し

離れた所から見ていた

「おいグリム、隊長はどこ行つたんだ？」

ふとケリイが振り向いた

「隊長？そういえばどこだろ、戦術室かな？」

グリムの予想通り、リーベンハルトは戦

術室に来ていた

グリム達とは正反対にモニターを前に深刻な顔だった

「首都の被害はどうなんだ？」

「見てみる」

クラックスはモニターを操作して、首都

攻撃から数時間後の首都の映像を出した

「結構やられてるな」

「第一射は海に外れ、第二射は修正して山岳部に、そして第三射で市街地に命中」

命中した市街地には直径五十メートル程のクレーターのようになっていた

「やっぱりミサイルじゃねえな」

「となるとやはり……」「ああ……」

次の日、連合軍

上層部はかねてより計画していた、爆撃部隊『フクロウ』による、夜間爆撃作戦『Night-Owls（夜のフクロウ）』作戦の発動を決定した

この作戦は極秘扱いとなり、参加部隊以外には一切知らせないという徹底ぶりだった

作戦実行は四日後となっていた

帝国首都大總統

府——「大總統、お呼びでしょうか」

部屋に入ったシャロンは軽く頭を下げた

シュナイダーはイスに座り背を向けている

「シャロン、女神を一人欠いたそうだな」

「申し訳ありません」

「いや、これは戦争だ。人間とは極限の状態に置かれると、突如力が出るものだ」

「……はっ」

ここでシュナイダーはイスを回転させて、シャロンの方を向いた

「ところで、あの男からの連絡はあったか？」

「いえ、今の所は特に」

「そうか。では、引き続き頼むぞ」

「はっ」

シャロンは一礼し部屋を後にした

シャロンが部屋を出ると、シュナイダーは立ち上がり窓際に立ち、眼下に広がる町並みを見つめている

「ふふふ、順調だな」

じはらく任務の

ないグリム達は、その間もフライトシミュレーターで模擬戦闘を繰り返していた

「だぁー！また負けたぁ！」

四つ並んだ端のシミュレーターに座っていたケリイが、スコープを外しながら悔しそうに叫ぶ

「グリムお前、隠れてやってたんだろ！？」

「本当すごいよ、全然当たらないもん」

続いてカレンが驚きながらスコープを置いた

これでグリム・ミズキ組の五連勝だ

「いやいやいや」

シミュレーターを終えたグリムは謙遜しながらも口元は笑っている

「ちくしょう！笑ってやがる！」

「私なんかほとんど何もしてませんでしたよ」

「そんなことないよ、何度も助けられた」

「グリム！今度はサシで勝負だ！」

「はいはい」

ケリイはよほど悔しかったらしく、一対

一での勝負を申し出た

グリムは予想していたかのように返事をし、二人は席についた

「何か飲み物持ってくるね」

「あ、はい」

カレンはそう言って部屋を出て、ロビー

へ向かった

ミズキはその場に残り二人の戦いを見ている

ガラン――

「よいしょ」

カレンは両手一杯に飲み物を持ち、来た道に戻ろうとした

「ん？あれは……」

ふとロビーにあるソファーを見ると、リ
ーベンハルトが誰かと電話をしているようだった

「……わかった、おれから伝えておく。ああそれじゃな」

電話を切ったリーベンハルトは、視線に
気付き振り向いた

「なんだ、嬢ちゃんか」

「隊長、誰かに電話ですか？っていうか『嬢ちゃん』はやめてください」

「はは、悪いな」

リーベンハルトはポケットから煙草を取り出して火をつけた

「グリム達はどうしたんだ？」

「シミュレーターで勝負してますよ。隊長もどうですか？グリムがすごいんですよ」

両膝に手を当てながら立ち上がり……

「悪いな、おれはもう寝るよ。お前等も早く寝ろよ」

そう言いながら自分の部屋へ向かった

10 Suspicion「疑惑」

カレンが飲み物を持ってシミュレータールームの前まで来ると

「ちくしょー！」

中からケリイの悲痛な叫びが聞こえてきた

（また負けたんだ）

カレンが少し呆れながらドアを開けると、座ったまま落ち込むケリイと意気揚揚と立ち上がるグリムがいた

「はい」

「サンキュ」

落ち込むケリイに歩み寄り飲み物を渡すが、だいぶ堪えているようだ

38

「ケリイも頑張ったよ」

「そうかあ？」

「うん、頑張った頑張った」

カレンはなんとか励まそうと肩をポンポンと叩く

ケリイは渡されたドリンクを一気に飲み干し、空のコップをカレンに突き返した

「グリム！また勝負しろよ！」

「ああ、もちろん」

「私も行くね」

そう言つて二人は自分の部屋に戻つて行つた

「それじゃ、おれ達も戻ろうか」

「そうですね」

グリム達も、歩きながらいつまでも終わらない二人の言い合いを笑いながら部屋へ向かつた

そして三日後の夜、連合軍空軍最大のリカール基地から、爆撃部隊『フクロウ』が飛び立つた

電子戦機を伴つた編隊で、ジャミングによりレーダー網をかいくぐりながら目標に接近

日付が変わり、0200時ちょうどに『Night-Owls』作戦は開始される

目標は、連合国領に最も近い帝国空軍基地アスガルド基地

「今出発した。攻撃開始は二時ちょうどだ」

『わかつた……近々こちらの準備も終わる。そうすればお前の任務も終了する』

「……ああ」

「こちらフクロウリーダー。目標に接近、各機爆撃準備はいいか？」

「フクロウ2、フクロウ4全機、準備よし」

基地を飛び立って数十分後、爆撃部隊は予定通り目標の近くまでやってきた

機体を黒系統にカラーリングしたフクロウは、闇夜に溶け込みながら静かにその時を待った

そして午前二時ちょうど――

「フクロウリーダーから各機、攻撃を開始する」
「了解」

機体下部のハッチを開け、投下ポイントへ向かう
だが次の瞬間には隣を飛んでいた仲間の機体は爆音と共に空中で爆発、跡形もなくなっていた

「な、なんだ!？」

「こちらホークアイ、前方にUNKNOWN出現！」

「馬鹿な!あの距離から攻撃してきたのか!？」

ドオオン――

「くっ!」

「今度はフクロウ4がやられた!」

『全機撃墜を確認』

『情報通りだな、全機帰投せよ』

『了解』

『また手柄を立てたな、シャロン』

『畏とも知らずノコノコやって来た敵を落としたただけだ、たいしたことはない』

『威力を試すにはちょうどよかっただろう』

『……もろすぎる』

爆撃部隊全滅の知らせを受けた中央指令部には、その知らせを聞いた時から一つの可能性が浮かんでいた
それはもちろん、内通者の存在である

その後、この作戦の存在とその失敗、そして内通者の存在が伝えられた

「けっ！夜間爆撃なんてセコイ真似するからだ」

ブリーフィングルームに集められたグリム達

ケリイはいかにも機嫌悪そうにイスによりかかり、足は机の上だ

「お前みたいに全部真正面から突っ込んだら、被害が増えるばかりだ」

グリムが反論するが、ケリイの苛立ちは収まらないらしい
そこヘリ・ベンハルトが入ってきた

「軍からの発表は聞いたな？」

「はい」

「上の連中はどうあっても、あそこを潰したいらしい。よって今回はおれ達も出る事になった」

グリムは素朴な疑問をぶつけた

「でも、ここからだといふ距離がありますよ、なんでわざわざおれ達が？」

するとリ・ベンハルトは少し黙った後

「グリム、お前がいるからだ」

「え？」

「お前以前出撃した時女神の一機を落としてるだろ、それがお偉いサンの目に止まっただけ」

確かにグリムは以前、ヴァルキリ-を一機落としているが、その時はあまりに必死だった為、グリム自身もよく覚えていなかった

「リオール基地を経由して、帝国のアスガルドへ向かうことになっている」

ブリーフィングを終えると、早速出撃準備に入った

その後、リオール基地までやってきたグリム達は、補給と整備が終わるのを待っていた

「おい聞いたか？やっぱスパイがいるらしいぜ」

「爆撃作戦は参加部隊にしか知らせてないらしいしな」

基地の整備兵達が整備の合間に噂話をしている

同行した電子戦機からの報告により、敵がレーザー兵器を実戦投入してきた事が明らかになった

「レーザー兵器か」

「カレンのみたいのが出てくるのか」

「私のはまだ試作機だから。彼女達のはおそらく完成品、威力も有効射程も全然違う」

いくら試作機であろうと、彼等はレーザー兵器の力を目の前で見

ている

あれよりも強力なレーザー兵器が自分達を狙っているのだ

（今のシルヴァーナで勝てるだろうか）

少しの不安と、それよりも少し大きな使命感を感じていた

11 Sky-Of-Betrayal「裏切りの空」

帝国軍技術開発局――

ここは帝国軍の兵器開発を一手に引き受ける機関だ
現在は主に【遺産】の研究を行っている

大きなモニターを前に、部屋一面に並べられた端末を、局員達が
操作している

部屋にはキーボードを叩く小さな音が響いている

「シュナイダ - 大總統、御報告いたします」

局の責任者が自分の席からシュナイダーと話している

「うむ、なんだ？」

「例の兵器の件ですが、もう間もなく最終調整が完了いたします」

「そうか、よくやった 使えそうか？」

「発射には問題ありません 他にも機能がある様ですが、そちらは
調整が終わり次第解析に入ります」

「わかった 私もそちらに行くぞ」

「は、お待ちしております」

（ふふ、ついに世界は私のものだ）

その頃リオール基地では急ピッチで作業が進められていた

「おら！さつさと燃料持ってこい！」

「モタモタすんなよ！」

整備兵達の叫び声が飛び交う中、グリム達は作戦の説明を聞いている

「という訳で今回は一個中隊で作戦にかかる 説明は以上だ、質問は？」

グリムが辺りを見回し

「ありません」

と言った

「よし、各自準備にかかれ」

それを聞いて全員準備に向かった

するとグリムはリー・ベンハルトに呼び止められた

「隊長、なんですか？」

リー・ベンハルトはグリムの肩に手を置き、耳もとで囁くように言った

「戦闘中は、上に気をつける」

それだけ言っただけでリー・ベンハルトも準備に向かった

「上？」

この時グリムはリー・ベンハルトの言葉の意味がわからなかった
しかしこの後すぐ、その意味を知ることになる

「間もなく作戦空域に入る 全機戦闘準備」

アスガルド基地から南東八十キロ

リール基地を飛び立った飛行中隊に命令が下り、攻撃開始を待つ
まだ敵がやってくる気配はない

「しかしよお、スパイがいるんならこの作戦もバレてるんじゃないか？」

その可能性は大いにあった

爆撃部隊全滅の前後、連合軍の部隊配置に関するデータなども引き出されている

「なら女神達が来るかもしれないな」

「グリム、噂をするば……だ」

「敵航空部隊接近！全機迎撃態勢をとれ！」

遠くの空に小さな影がいくつも見えてきた

はつきりとは見えないが、航空機であることは明らかだ

「迎撃開始！」

帝国軍技術開発局――

「大總統お待ちしておりました」

「調整はどうだ？」

「先ほど終了しました いつでもいけます」

目の前のモニターには何か巨大な兵器の図面や様々な数字が並ん

でいる

「これが……」

「【遺産】です　これがあればこの戦争も早期終結となるでしょう」

「名はなんだ？」

「克蘭ブル・レイ」

「なるほど　国も崩壊するだろうな」

シュナイダーは口元にうつすら笑みを浮かべ、局員に指示をだす

「よし　さつそくこいつの力、連合に見せてやろう」

シュナイダーは克蘭ブル・レイの攻撃座標を指定した
その座標は、今まさにグリム達が戦っている空域だった

戦闘空域では互いに譲らない接戦が繰り広げられていた

「四機目、落とした！」

そんな中、グリム達も着実に敵を落としていく

「もう！　一体何機いるのよ！？」

「敵残存率、五十二パーセントです！」

「おらカレン、あと半分だ！　ふんばれ！」

彼等にもさすがに疲れが見え始めた

だか目標はあくまでもアスガルド基地である

それを考えると、ついカレンも愚痴っぽくなってしまっ

そしてグリムはついに、作戦前のリーベンハルトの言葉を理解することになる

「ん、なんだ？敵が離れていく……」
「なんだ、逃げんのか？」

その時、味方の管制機から通信が入った

「上空に熱源体、急速接近！」
「上！？」

上を見上げ目を凝らすとミサイルのような物が落ちてくるのが見えた

それは全員が見上げる中、弾けるような音と共にレーザーが雨の様に降り注いだ

「なっ！？」
「避ける！」

帝国軍機はすでにその場を離れ、雨の下にいるのは連合軍機だけだった

「うわっ！くらった、落ちる！」
「ちくしょう！何なんだこれは！？」

次々に連合軍機が落ちていく

グリム達は端の方にいたため、なんとかよけることが出来たが、雨の中心部は悲惨な状況だ

ある者はコクピットを直撃し即死、またある者は操縦不能になり墜落、水面に激突した

なんとか脱出したパイロット達は、水面に浮かぶ破片につかまっている

「あんなにいた味方機がもうこれしかない」

「一体ありやなんだったんだよ!？」

「帝国の新兵器でしょうか？」

「レーザー兵器……これが【遺産】……？」

茫然と下を見下ろす彼等の耳に聞き慣れない声が聞こえてきた

『連合軍の諸君、見てくれただろうか?』

「誰だ?これは」

「父さん……」

「これがシュナイダー大總統……」

シュナイダーは国際チャネルを使い、連合軍全てに通信している

『これが【遺産】の力、戦争を我らの勝利で終わらせる力だ』

シュナイダーの話はなおも続いているがグリムは作戦の事が気になっ
ていた

「隊長、どうしますか?味方がこれだけじゃ」

「少し待ってくれ、迎えが来るんだ」

「迎えって……?」

すると今度は彼女達が現われた

「来た」

『やはり凄い威力だな　私達のととは比べものにならない』

迎えと言われてやってきたのは、黒の女神だった
そして真つすぐにグリム達に近づいてくる

『リーベンハルト、お前の仕事は終わりだ』

「ああ、わかつてる」

「おい、隊長！どうゆう事だよ！？」

彼等の疑問に答えたのは、リーベンハルトではなくシャロンだった

『まだわからないのか？こいつはもともと帝国の軍人だ』

「…………スパイ」

ミズキがぼつりと呟いた

味方の情報を敵に流し爆撃部隊を全滅に追いやった憎むべき相手が、こんなにも身近にいたのだ

「隊長…………冗談ですよね？」

「…………すまん、グリム」

今まさに味方だった人間が敵となって自分達のもとを離れていく
遠ざかっていくその姿を見ても、グリム達は信じられずにいた

12 Brains - Of - The - Past 「過去の頭脳」

彼等は四機で基地に戻ってきた

事情を知らない兵士の中には、撃墜されたのかと心配する者もいた
しかし彼等は何も答えずに戦術室に向かった

「あ、お前達……」

言いかけたクラックスは、グリム達の只ならぬ雰囲気を感じ取った

「何かあったのか？リーベンハルトはどうしたんだ？」

グリム達はうつむきかげんのままだ

「おい、どうしたんだ」

ここでもうやくグリムが口を開いた

「室長、実は……」

グリムはついさっきの出来事を話した
だが話せば話すほど、事実を固めていくだけだった

「あいつが、スパイだった……」

「私見ました 隊長が誰かと連絡取ってるって今思えばいつもと
様子が違いました」

「んー……」

クラックスは腕を組み何やら考えている

「となると、あのデータはあいつが……」

「データって？」

「おい、例のデータを出してくれ」

モニターに兵器ではない何かの図面が表示された

「いつの間にかデータベースに記録されていたんだ 【遺産】 のデータだよ」

「これは何？」

「おそらくこれは、非常に高性能なAIだ 肉体のない人間と言ってもいい程のな」

「これを隊長が置いていったと」

残されたデータにはこの【遺産】の在処も記されていた
場所は連合領内南部、エルサント地方――

リーベンハルトが残したデータにより【遺産】の在処を知った連合は、さっそく部隊を派遣し調査を開始した
その部隊にはグリム達も同行していた

雪と氷が支配する極寒の地、エルサント
厳しい環境の為人も住んでおらず、調査も不十分だった

「よし、開いた」

【遺産】が眠る地下への扉は、厚く積もった雪の下にあった
口を開けた入り口の奥は、吸い込まれそうな暗闇が続いている

「ここ大丈夫なの？」

「カレン、ビビんなよ 隊長が残したデータだ」

「……うん」

そう言っただけでケリイが先頭で階段を降りていく
グリム達もそれに続く

階段はとても静かで寒く、足音が奥まで響く

「おい、扉だ」

「解析班を呼べ」

解析班によつて扉が開かれた
身長は何倍もある巨大な扉が地響きと共に左右に開いた

「すごいな……」

「中に何があるんでしょう」

「入ればわかるわよ」

「そつゆうことだ 先行くぜ」

扉を入り数歩ゆつくりと進む

手には拳銃を持ち、辺りを警戒しながらゆつくりと

「暗くて何も見えない」

中は明かり一つ無い暗闇だ
だが突然部屋の照明ついた

「いきなり点くなよ！」

眩しさのあまり手で目を覆う

少しして眩しさにも慣れ、手をどけた

「何、ここ……」

カレンが驚きの声を上げる

部屋にはいくつか端末が並ぶだけで、特に目立つ物もない

「ここに何があるんだ？」

クラックスが呟いた時謎の声が響いた

「人が来タノハ、久シブリデスネ」

「誰だ！？」

全員とつさに銃を構える

「ソノ服装……アナタ方ハ王国デモ我々共和国デモナイデスネ」

「王国？共和国？」

「……コノ時代ノデータヲ下サイ」

クラックスが、現在の西暦や世界情勢などを教えた

「アレダケノ戦争ヲシテモ、マダ戦ウノデスネ」

「な・なあ、あんたは一体何者なんだ？」

「コレハ失礼シマシタ」

すると部屋のある円状の台の上に、天井の方から黄色の小

さな光が渦を巻きながら降りてきた

その光は徐々に人の顔のような形を成した

「申し遅レマシタ 私ハ共和国軍自律型戦略統括AI、通称『アグニ』です」

「AI？マジかよ……」

「本当に人間と話してるみたい……」

その後しばらく黙っていたアグニだったが、少し困ったように話し出した

「モシヤ、『クランブル・レイ』ガ使用サレマシタカ？」

「あのレーザーの雨か あれが、どうかしたのか？」

アグニはゆつくりと話を始めた

語られたのは王国の侵攻に始まる旧世代の戦いの歴史

「最後ハ戦術ナド無ク、アレノ撃チ合イニナリマシタ」

「撃ち合いつてことは、あんな兵器がまだあるのか？」

「両軍二、一基ズツ シカシ我ガ軍ノ方ハ戦争ノ最後ニ破壊サレマシタ」

そしてアグニは、最後にグリム達に警告にも似た話をする

「クランブル・レイガ使用サレタツイウコトハ、『ルドラ』モ目覚メテイルト思イマス」

「ルドラ？」

「私と同じ自律型ＡＩデス 私ヨリモ好戦的ナ擬似人格ヲ持ッテイマス」

「それを父さんが……」

カレンは悲しげな顔をする

今人々を苦しめる戦争は、自分の親が起こしたものだ
彼女は自分のことのような責任感を感じていた
「何か対抗策はないんですか？」

ミズキが聞くと、アグニはスクリーンを出すと言った
すると部屋の奥の床がせり上がりスクリーンが現われた
スクリーンには世界地図が表示され、あるポイントが示された

「でもここって島も何もないわよ」

「ここに何が？」

「共和国軍ノ秘密格納庫ガアリマス」

「格納庫の中は？」

「戦争末期ニ開発サレタ当時ノ最新鋭機デス」

グリム達は黒の女神達に対抗すべく、最新鋭機の眠る海域に向かう

13 Four - Wings「四つの翼」

帝国首都大總統府『遺産の間』――

「長期に渡る潜入任務、ご苦労だった」
「はっ」

ねぎらいの言葉をかけるシュナイダーにリーベンハルトは頭を下
げ答える

その少し後ろにはシャロンも立っていた

「シャロン、奴らは動いたか？」

「どうやらエルサントにむかったようです」

「エルサント……あんなところに何が？」

目的が分からず困惑するシュナイダーとシャロン

だがその答えは後ろから聞こえた声が解決した

「ソコニハ『アグニ』ガイル」

声の主はエルサントに眠っていたアグニと同じ、高性能AIだった

「ルドラ、アグニとは何者だ？」

「アグニ……我ト同ジ統括AIダ」

ルドラは淡々と話す

その口調は寡黙で冷ややかな印象を与える

「ドウヤラ、アグニモ目覚メタヨウダ」

「だが我らには克蘭ブル・レイがある どうあがこうとも……」

その時シュナイダーの言葉を遮るようにルドラが言った

「イヤ待テ 敵ハオソラク唯一ノ対抗手段ヲ取ルハズダ」

「対抗手段がある？」

「共和国軍ガ、クランブル・レイヲ破壊スル為ニ開発シタ兵器――」

「エグザイル？」

「ソウ、『エグザイル』 クランブル・レイニ対抗デキル唯一ノ兵器」

旧世代戦争の中期～末期

王国と共和国が、競って開発したクランブル・レイ

この時、共和国軍のクランブル・レイは謀反を起こした兵士によって自爆させられていた

そこで開発されたのが多目的戦闘小隊機『エグザイル』

「で、ここにその『エグザイル』ってのがあるんだな」

今グリム達は船の甲板にいる

海底にあるとゆう格納庫付近の海上に来ていた

「本当にこの下にあるんですかね」

ミズキは手すりから上半身だけ乗り出して海をのぞく

進む船があげる水しぶきの向こうには、並走するように魚の群れが見える

「皆サン、ソノ辺リデ止マッテ下サイ」

アゲ二の指示で船を止める

辺りを見渡すが、島はおろか陸地の影すら見えない

「それでどうすればいいんだ？」

「今人口ヲアゲマス」

「上げるって……」

その時突然地震のような揺れが襲った

「な、なに！？」

全員慌てて手すりに掴まる

すると今度は目の前の水面が盛り上がり小さな島が現われた

「ほ、本当に上がって来たぞ」

「サアドウゾ 私ハ管制室デ待ッテイマス」

そう言われグリム達は島に上陸した

水溜りをよけながら進み、島の中央付近にある入口からエレベーターで下がる

「さすがに深いな」

しばらく下がりエレベーターは止まった

ドアが開き、直接管制室に出た

「あ！あれ！」

そう叫びカレンが突然走り出した

他のメンバーも後を追いつ、一面ガラス張りの壁から下を見ると

「す、すげえ……」

「これがエグザイルか……」

彼らの眼下には広い敷地に並ぶ四機の戦闘機があった

現行の戦闘機とは全く違う外見を持つそれは、静かに主を待っているかのようだった

「コレガ『エグザイル』デス」

モニターに映ったアグニが自慢気に言う

「エグザイルノ機体ハ、コノ時代ノ戦闘機トハ違イ、『アーム』ヲ
装備シテイテ専用ノ武器ヲ持ッテ戦イマス」

「ちょうど四機みたいだけど、誰がどれに？」

「先程見セテ頂イタ、皆サンノコレマデノ戦闘データヲ基ニ、最適
ノ組ミ合ワセヲ提案イタシマス」

《EX-01 イージス》

平均的な装備と強化されたレーダー、センサー感度を持つ指揮官
向けの機体

パイロットは隊長のグリム

《EX-02 エスぺランサ》

機体制御能力が高く、高出力のブースターによる機動力を生かし
た戦闘が得意

パイロットはミズキ

《EX-03 バスター》

大口径のレーザー砲やステルス性を持つミサイルなど、主に後方支援を担当する

パイロットはカレン

《EX-04 アーセナル》 四機中で最も弾数の多い機体

ミサイルはマルチロック機能を持ち、優れた火器管制能力を持つパイロットはケリイ

「早速デ申シ訳アリマセンガ、スグニ発進シテ下サイ」

「え？」

「敵機が接近中デス ルドラニ読マレタイタヨウデス」

ルドラはグリム達の動きを先読みし、部隊を差し向けていた

「エグザイルか……どんなものか見てやろうじゃないか なぁリーベンハルト」

「シャロン、油断するなよ お前も旧世代の技術力は知ってんだろ？」

「私がそう簡単に落とされと思うてるのか？」

シャロンには黒の女神の隊長に選ばれた自信とプライドがあった
それ故にリーベンハルトは心配だった

「お、おい！これ大丈夫なのか！？」

アーセナルのコクピットに乗り込んだケリイだが、何故か騒いでいる

というのも発進態勢に入った為、機体が垂直に上を向き始めたからだ

固定された土台から天井に向かってレールが伸びると同時に天井のハッチが開き奥に外の光が見える

「システム、進路オールグリーン カウントダウン開始」

カウントダウンが始まると操縦桿を握る手に力が入る

「3……2……1……エグザイル発進！」

合図と同時に高速で射出されあつという間に射出口から飛び出した

「どうだみんな！イケるか！？」

「大丈夫です！」

「いつでもいいわよ！」

「つたりまえだ！あいつらにお礼してやるぜ！」

あれだけの加速の中でも体にはほとんど負担を感じることは無かった

旧世代の技術力に驚きながらも隊列を組み、あつという間に飛び去った

14 EXILE「エグザイル」

『前方の孤島上空にアンノウン出現！高速で接近中！』
『来たな』

『気ヲ付ケロ 性能八明ラカ二向コウガ上ダ』
『だからお前に部隊を預けたんだ 私達はデータを収集する』

航空部隊から数キロ後ろにシャロンとリーベンハルトのヴァルキリーがいた

『モウスグ会敵スルゾ』

「敵機を視認、攻撃準備だ」

各機コクピット内のパネルを操作し標準武装のビームマシンガン
をアームに装備した

「新しい相棒の実力、見てみようか！」
「各機、攻撃開始！」

グリムの指示を待ってましたとばかりにケリイが飛び出す

「ほらよ！ご挨拶だ！」

ケリイは同時に四機の敵機をロックしミサイルのスイッチを押した
機体後部のミサイルブロックが開き、八発が発射され一直線に敵
機を襲う

敵機の回避行動に合わせて追尾し見事に命中、撃墜した

「今度は私よ！」

カレンは機体の脇にあるレーザー砲の照準を合わせる

「当たって！」

砲口に光が集中する

次の瞬間、放たれた光が突き進み敵機を包む

それでも光は進み続け後ろにいたもう一機を破壊した

「す……」

カレンが予想以上の威力に驚いていると、今度は向こうから撃ってきた

「おっと！」

グリムは右アームのシールドで敵の機銃を防ぎそのまま左アームのビームマシンガンで攻撃した

攻撃をもろに浴びた敵機はバラバラになりながら落ちていった

「ミズキ！大丈夫か！？」

ミズキのエスぺランサは空気抵抗を意識した外見の高機動機だ

グリムの心配をよそに後ろを取った敵機に瞬く間に接近しビームマシンガンで落としていた

「大丈夫！なんとかやれます！」

その後も彼らは新しい力を存分に発揮し敵部隊を全滅させた

『確かに脅威ではあるみたいだな』

『だが相手はルドラが制御していた部隊だ 私達とは違う』

数キロ離れていたシャロンとリーベンハルトは収集したデータを冷静に分析している

それぞれが違うタイプの装備をすることで、幅広いミッションに対応することができる

それが『多目的』たる所以である

『シャロン、戻って詳しく分析するぞ』

戦闘の終了を確認し、二人は基地に引き返した

『どうなんだリーベンハルト 部下だった者を敵として撃たねばならない気分は？』

基地に戻る途中シャロンがそう言ってきた

『……お前には関係ないだろ』

リーベンハルトは静かに言う

その言葉からは複雑な心境が感じられた

「リーダーから消えた」

「おれ達の力を計ろうってか」

「どちらかは隊長だったんでしょうか？」

「うん、だと思うよ」

今度会う時は敵同士　四人全員が心の中でそう思っていた

自分達に操縦技術を叩き込み、空戦のイロハを教えてくれた隊長も、今は撃たざるを得ない敵となった

「さあ　帰ろう」

彼らはブルーオーシャン基地に戻る

今が戦争である以上、撃たねば自分が撃たれる状況である以上――

やるしかない

そう自分に言い聞かせながら……

15 Meet - Again「再会」

新たな翼『エグザイル』を手に入れたグリム達は、その後幾つかの戦場へ派遣され驚異的な戦果をあげる

「上を見る！エグザイルが飛んでる！これなら勝てるぞ！」

一般兵の中には彼らを英雄と呼ぶ者も始め、彼らとエグザイルの名は帝国軍兵士にも知られるようになっていた

エグザイルの登場で互角だった戦況はいつしか連合軍有利に向かっていた

そんなグリム達に意外な訪問者がやってくる

「ふう……」

「グリムさん、お疲れ様です！」

「あとの事、よろしく」

「はい！」

グリム達が作戦を終えて基地に戻った

パイロットスーツの前を開けながらシャワールームに入った

軽くシャワーで汗を流し出てくると、同時にケリイも出てきた

「おう、グリム お前大丈夫だったか？」

「ああなんとか ミズキに助けられたよ」

脱いであったパイロットスーツを専用の大きな洗濯機に放り込む

「あいつのエスペランサは速えーよなあ」

「カレンのバスターだって攻撃力が凄いじゃないか」

他の二人の話をしながら軍服に着替え、シャワールームを出る

髪を拭き、タオルを首にかけたままロビーを通るとカレンとミズキに呼び止められた

「二人共どうしたの？」

「あの、これ……」

ミズキが一枚の紙を差し出した

『——今夜2100時、東の丘で待つ——』

「これは……」

「今朝私達宛てに届きました」

「グリム、どうすんだ？」

グリムは手紙を見つめながら少し考えた

「……行くっ」

「行くの？」

「そりゃ罾かもしれないけどさ」

「ならおれ達も行くぞ」

手紙には一人で来いとは書かれていない
しかしたとえ書かれていてもケリイは

「行く」

と言っただろう

それをわかっていたグリムは
「わかった」

と少し笑いながら言った

2100時――

グリム達は基地の車両を一台拝借し、指定された丘にやってきた

丘の下にはまさに宝石をちりばめたような夜景が広がっている

すると彼らの背中に強い光が当てられた

振り向くとバイクが一台、エンジン音を響かせていた
逆光でよく見えないが誰かがバイクの前に立った

「誰だ？」

顔の前に手をかざしながら相手の顔を見ようとする

「お前等、ちゃんと時間通りに来たな」

「やっぱりあなたでしたか……リーベンハルト隊長」
「もうお前等の隊長じゃあねえよ」

グリム達にとってリーベンハルトは特別な存在となっていた
今でも隊長と呼んでしまうのはその表れだ

「隊長、ここは敵地だろ？何しに来たんだ？」

ケリイが本題を切り出した

するとリーベンハルトはおもむろに口を開いた

「お前等、こつちに来る気はないか？」

「え？」

リーベンハルトの口から出たのは思いもよらない言葉だった

みんなが戸惑う中、グリムはハッキリと言った

「行きません」

「お前ならそう言うと思ったよ」

それを聞いたリーベンハルトはバイクにまたがりエンジンをかけた

「次会う時は手加減なしで行くぞ」

「……はい」

爆音と土煙をあげてリーベンハルトが去って行く

（手加減なしで行くぞ）

遠ざかるバイクのライトを見つめる目には強い決意が見えた

（エグザイルガマダ残ッテイタトハナ……）

その頃、帝国首都遺産の間では連合軍エグザイルの登場で、連合軍有利に傾き始めた戦況を打破しようと作戦会議が繰り返されていた

(ソロソロカ……)

16 Break-Through「突破」

グリム達エグザイルの活躍により、戦争は一気に終結に向けて加速する

「航空部隊全機へ これより帝国軍最終防衛線を突破する 全機エグザイル部隊に続け！」

連合軍はすでに帝国首都周辺に展開された第三、第二防衛線を突破していた

そして陸海空合わせた最大規模の部隊で最終防衛線に攻撃をしかける

「全機、隊列組み終わりました 同時に全機攻撃準備完了」

「よし、行こう」

グリム達を先頭に約四十機にも及ぶ大規模の部隊が空を埋め尽くす両の翼で大気を切り裂き、曇り空の中綺麗な隊列を組んで飛んでいる

しばらく飛ぶとグリムのイージスのレーダーに反応が出た

「前方に敵反応」

イージスのレーダーは他の機体よりも強化されているため、一番先に敵の接近を知ることが出来るのだ

「射程内に入ったわ 少しでも減そう」

長射程を誇るカレンのバスターが攻撃体勢に入った

正面から近づく敵機をロックしトリガーを引いた

発射された光は瞬間に敵機に届き、二機の間を突き抜けていった
直撃はしなかったものの、レーザーの超高熱のため翼が溶け、そこから
の爆発で墜落した

「やるなあ！カレン！」

そして両軍とも射程内に入った

そして同時にミサイルと機銃が飛び交う空戦が始まった

「お互いなるべく援護出来る距離を保て！」

「後ろ！来てるぞ！」

「撃て！撃て！撃て！」

『全機！あの四機を落とせ！』

勝利を焦る帝国軍はグリム達のエグザイルに狙いを絞り、一斉に
向かってきた

「一気に来ましたよ！」

「散開しろ！ケリィ頼むぞ！」

「はいよ！」

ケリィはアーセナルのマルチロック機能を最大限に使い、迫り来る
敵機を迎撃する

「どうだ？だいぶ減ったか！？」

「ああ！でもまだ来る！」

爆発をさせて、残った敵機が迫る
散開するエグザイルの後ろをとった

「まずい！後ろをとられた！」

「私が行きます！」

ミズキのエスペランサが、追ってくる敵機を振り切りグリムの援護に向かう

『ダメだ！速すぎる！』『なんてスピードだ！』

あつと言う間に敵機を振り切ったミズキは、グリムを狙う敵の後ろについた

『は、早い！』

驚いた次の瞬間、エスペランサの高機動ミサイルが命中した

「また助けられたね」

「いえ とんでもないですよ」

友軍機の助けもあつて空の戦いは連合軍有利に進む

「防衛線はどうだ？」

「はい 地上は持ち堪えています、上空は突破されるのは時間の問題です」

「地上はそのまま持ち堪えさせる うまくエグザイルを誘い込め 奴らさえ消えれば我らの勝ちだ」

部下に指示を出し、シュナイダーは数歩下がり腕を組んでスクリーンの方をむいた

（我らにはまだアレがある　負けはしない）

「最終防衛線突破しました！」

連合空軍は帝国首都への最後の壁を突破した
地上部隊も有利に立っていたため、給油の後帝国首都へ向かった

「航空部隊突破されました！」

「よし クランブル・レイを起動しろ」

指示を受けたオペレーターがパネルを操作する
「クランブル・レイ起動します」

画面が赤くなり、グラグラと揺れだした

すると首都の郊外にある小さな山の、中腹あたりにあるハッチが開き、巨大な砲身が現われた

「目標、接近中の連合空軍部隊」

「目標設定終了」

「発射！」

巨大な砲身が更に伸び爆発音と共に砲弾が発射された

砲弾は一瞬のうちに空へ消えた

給油を終えた連合空軍部隊は首都まで後わずかの距離まで来ていた

「これは……！」

グリムの顔が急に緊張しだした

リーダーに高速で接近する物体があった
明らかに航空機ではない

「クランブル・レイだ！全機回避行動！」

グリムの叫ぶ声を聞いて上を見上げると、もうそこには微かに砲弾が見えていた

「くそ！」

回避行動に入ったのと同時に、彼らの上にレーザーの雨が降った

「うわあああ！」

「クロウ小隊が全滅した！」

「ダメだ！落ちる！」

「相変わらずすげえ威力だな」

「部隊の三分の一を失いました」

砲弾の発見が早かったため被害は最小限に留めることが出来た

しかし残った味方部隊は十数機、首都を攻めるには少し心許ない数だ

「グリム！無事か！？」

その時友軍から通信が入った
リーダーには五機の友軍反応、声の主はクラックスだった

「室長！？どうしてここに？」

「何かいやな予感がしたんだ カレン、君の以前の機体を借りたよ」
「あ、はい」

「克蘭ブル・レイは次弾発射までにそれなりの時間が必要だ 今のうちに首都を攻めよう」

クラックスの小隊と合流し、克蘭ブル・レイ発射の隙について
首都攻撃を狙う

「見えてきた 首都だ」

太陽が地平線に消え、輝く夕日から漆黒の闇夜に変わろうとしていた頃連合軍部隊は、ついに首都上空に入った

17 Enemy-Of-True「本当の敵」

「連合軍航空部隊が首都上空に入りました 地上部隊も接近中です」

「シャロンとリーベンハルトを出せ」

その頃二人はすでに自機に乗り込み待機していた

「出撃命令が出ました」

「やっと出たか」

シャロンは文句を言いながらヴァルキリーを起動させた
その隣ではリーベンハルトも準備している

彼の機体はヴァルキリーをベースに改良された専用機である

「今回は大總統も来られるんだろ？」

「私達が奴らを落とすところをご覧になりたいそうだ」

「じゃあ他の機体はどうすんだ？パイロットいねえぞ」

「他はルドラが制御することになっている」

「ハッチ解放 進路クリア 発進どうぞ！」

「さあ行くぞ」

ハッチがゆつくりと開き滑走路に出る

滑走路中央の誘導灯に沿って加速し、大空に飛び立った

「みんな、来たぞ レーダーに反応多数」

「やっと来たのかよ」

そして今回も、まずバスターの長距離砲による先制攻撃を行なう
前方の敵に向かって閃光が走る

しかしレーザーはかすることなく敵の集団を抜けた

「避けた？」

「今までのやつらとは違うってことだな」

「地上部隊が来るまでに終わらせよう！」

両軍高速で接近し、まずはすれ違いざまの攻防で何機かが被弾した
その後は反転し、入り乱れる乱戦が始まる

そしてグリム達は、敵が今までとは違うという事を実感する

「おい！なんかおかしくねえか！？」

「はい！あんな無茶な旋回したら体が保ちませんよ！」

「本当に人間が乗ってるの!？」

敵機の動きは、パイロットにかかる

「G」

を完全に無視したものだ　驚きながらも戦っているとグリムがある事に気付いた

「いない……」

「あ？　なんだって？」

「コクピットに誰も乗ってない！」

敵機のコクピットには誰も乗っていなかったのだ

「どおゆうこと!？」

「オソラク、ルドラガ制御シテイルデショウ」

通信してきたアグニがその答えを出した

「やはりそうだったか」

クラックスも感付いていたようだ

とゆうのもクラックスは、アグニのシステムを調べるうちに、航空機を遠隔操作する機能があることを知った

アグニに聞けば、ルドラにも同じ機能があるという

「なるほどね」

「誰も乗ってないんじゃないかな」

その後はエグザイルの性能を存分に生かし、次々に敵機を撃墜していく

リーダーに新たに三つの影が映った

二機はヴァルキリー、もう一機は空中管制機のような

『目障りなエグザイル！ここで消えてもらおう！』

「ヴァルキリーか！」

「隊長……」

『言ったるグリム 次戦場で会う時は手加減なしだってよ』

シャロンとリーベンハルトを加え、戦いはさらに激しさを増していく

「当たれ！」

右アームに装備したビームマシンガンを連射する
敵機にはいくつも穴が空き爆散した

『ちっ！』

「うお！当たった！？」

ケリイの機体が激しく揺れる

シャロンの放ったレーザー砲が、アーセナルのミサイルブロックをかすめた

ケリイはすぐにミサイルブロックを切り離れた

「ケリイ！大丈夫か？」

「ああ！大丈夫だ！」

ケリイは体勢をすぐ立て直た

『なかなかしぶといな』

管制機から見ていたシュナイダーは、長引く戦闘に苛立ちを感じていた

『ルドラ、クランブル・レイはまだか？』

『準備ハ出来テイル』

『ならばすぐに撃て！』

再び巨大な砲身が伸び火を吹いた

するとシュナイダーの乗る管制機に警報音が鳴り響いた

『なんだ！？』

『クランブル・レイの照準が本機にロックされています！』

『なんだと！？ ルドラ！どうゆうことだ！』

『何故ココマデ攻メ込マレタノカワカルカ？』

『……何が言いたい？』

『オマエハモウ必要ナイトユウコトダ』

機内に響く警報音は次第に大きく、早くなっていく

『砲弾、来ます！』

『回避だ！』

管制機はすぐさま回避行動に移った

だが降り注ぐ雨は容赦なく管制機の胴体に命中した

『馬鹿な……こんなことで……』

機体はシュナイダーの思惑と共に空に散った

『大總統！』

「父さん！」

爆発を見て二人が叫ぶが爆発音にかき消される　さらに、ルドラが制御していた帝国軍機がシャロンとリーベンハルトにも襲いかかった

『くそ！』

『ルドラ！これは何のつもりだ！？私達を裏切るのか！？』

『勘違いシテイルナ　我ハ最初カラオマエ達ヲ味方ト思ッタコトハナイ』

その時再びクランプル・レイが発射された
目標は下で戦っている地上部隊だ

雨は帝国と連合を無差別に攻撃した

上空から襲う雨に対してなすすべの無い地上部隊はその半数を失った

『我ハ勝ツタメニ生ミ出サレタ存在 負ケハ許サレナイ』

帝国首都全域を地震が襲った

するとクランブル・レイがある山がどんどん崩れていく

『準備ハ整ツタ 敵対スルモノハ全テ排除スル』

山が崩れ現われたのは航空機の何倍もある巨大な飛行物体だった
その巨大な体には、クランブル・レイを中心にいくつもの砲台がある

「な、なんだ……あれ」

「なんて大きなもの」

『あんなもんがあつたなんて、聞いてねえぞ』

『ふざけるなああ！』

『シャロン！やめろ！迂闊に近づくな！』

怒りに我を忘れたシャロンがリーベンハルトの制止も聞かず、突っ込んで行った

そして正面からレーザー砲を撃つ

『無駄ダ』

しかし本体に届く少し手前でレーザーは弾かれた

『シールドがあるのか！』

シャロンは距離をとるため機体を旋回させる

だがその時すでに敵の砲台はシャロンを捉えていた

『群ガル虫八叩力ナクテハナ』

砲台から一筋の光が放たれた

光はシャロンの機体を貫通していた

『シャロン！』

「皆サン！一度戻ッテ下サイ！」

シールドがある以上今はどうしようもない

これ以上被害を増やさないため、グリム達は撤退を決めた

『逃ゲルカ マアイイ、イクラアガコウト奴等ニ勝チ目ハナイ』

18 I m m i n a t - C r i s i s 「迫る危機」

突如現われた巨大兵器の力の前に撤退を余儀なくされたグリム達は、ブルーオーシャン基地に戻りあの兵器を倒す方法を探っていた

「やはり巡航ミサイルでは歯が立たないか」

連合軍は巡航ミサイルによる攻撃を試みるが、シールドを突破出来ず失敗に終わった

手探りの状況が続く中それを嘲笑うかのようにルドラの魔の手がその範囲を広げていく

「室長！帝国軍より入電！クラフト基地は壊滅状態！」

「これで帝国領土の半分ですね」

「帝国軍は相当数の兵器をルドラに奪われたからな」

机一杯に広げられた世界地図

二つある大陸の一方を支配する帝国

しかし今やその領土の半分はルドラの手に落ちていた

アグニによれば、今ルドラは一番最初の命令を実現させるため行動している

その命令とは――

《王国に敵対するものを全て排除せよ》

この命令によって、ルドラの攻撃の矛先は連合帝国両軍に向けられる

同時多発的なルドラの攻撃に対して、両国は和平を成立させると同時に同盟を組み、共に戦うことを誓った

「あのさ、いくらルドラの軍を潰しても、また奪われたら同じなんじゃねえのか？」

「私ノ遠隔操作機能ヲ応用シテプロテクトヲカケテイマスカラ大丈夫デス」

彼らはいよいよ行き詰まってしまった

「あのシールドをどうにかしなければ」

皆が頭を抱える中、ミズキがおもむろに口を開いた

「相手が機械ならコンピューターウイルスみたいな物が効くんじゃないでしょか？」

ミズキの発言に辺りは静まり返り、皆ミズキに注目した

よく考えればわかることだが、あまりに違和感のない会話で、彼らがAIであることを忘れていた

アグニも可能だ、と言ったが一つ問題点を挙げた

「ルドラニウイルスヲ送り込ムニハ、首都ノ本体ニ直接送り込ムシカアリマセン」

「かなりの危険がともなうな」

「でも、やるしかねえだろ 敵はおれ達が相手をする」

「なら、ウイルスを送り込む役は私がやるう」

作戦は決まった

巨大兵器のシールドを取り除く為ルドラのコンピューターにウイルスを送り込む

グリム達が敵を引き付けている隙に、クラックがコンピューターを操作する

「その作戦、おれも混ぜてくれよ」

「隊長！」

「やっぱ信用出来ないか？」

「いえ、そんなことないです」

「メリーベル基地が攻撃を受けています！」

ルドラの軍隊はパイロットを必要としない為、侵攻が早い
彼らにはあまり時間は残されていなかった

「時間がない さっそく作戦開始だ」

「発進どうぞ！」

ルドラの軍隊はさらに勢いを増し、帝国領土のほとんどは、その

無機質な侵略者に支配された

巨大兵器も支配地域の拡大と共に、連合国に近づいている

「そーら、敵さんが来たぞ」

ルドラの無人戦闘機とグリム達との空戦が始まった

クラックスを乗せたヘリはその隙に首都の大総統府に侵入した

首都にはすでに人影はなく、上空の戦闘が嘘のように静まり帰っている

誰もいない廊下を走りいくつもの扉を抜け、階段を下り、コンピユータールームの扉の前に立った

「目的の部屋に入った 作業を開始する」

クラックスは手にした通信機で外にいる仲間と連絡した
そこから管制機、味方部隊へと伝達された

「終わるまでふんばれよ！」

「巨大な熱源が接近してきます！」

「来たか」

遠くに見える雲に巨大な影が映っている
ゆつくりと雲を突き破ると、何本ものレーザーが飛んできた

「よける！」

グリム達を狙った攻撃を、サブスラスターをふかして回避する

「隊長！ここお願いします！」

「ああ！わかった！」

まだシールドは消えていないものの、注意をひく為に周りを飛び回る

「α8、12、撃墜！」

リーベンハルトの部隊も必死に応戦している

今は互角でも、疲労やGの影響がないぶん、長期戦になるほど不利になる

「急げよ、クラックス」

リーベンハルトは小さな声でつぶやいた

次の瞬間、隣を飛んでいた味方機が炎に包まれた

リーベンハルトの横顔が炎の色に染まる

「くそ！」

敵機はそのままリーベンハルトに狙いを変え、機銃を撃ちながらミサイル発射のチャンスを伺っている

「イーグルリーダー！後方に敵機！」

「誰か！リーダーを援護しろ！」

リーベンハルトは右に左に機体を振りながら、狙いを絞らせないようになっている

そこに味方の援護が追い付いた

単調な飛び方だった敵機は、すぐに撃墜された

「隊長！ご無事ですか！？」

「何発かくらったが影響はない 作業はもうすぐ終わるはずだ、ふんばれよ！」

そんな攻防が続く中、グリム達も必死に巨大兵器を足止めしている

「本当にもう！うっとうしいシールド！」

シールドはエグザイルの持ついかなる兵器でも突破することが出来ないほど強固なものだ

シビレを切らせたカレンが、シールドぎりぎりまで近づこうとする

「カレン！下手に近づくんじゃねー！」

「え？」

直後、カレンの機体は激しい衝撃に襲われた

「きゃああああ！」

不用意に近づいた為、その隙を突かれ、敵のレーザーで左アームを吹き飛ばされた

「カレン！大丈夫か！？おい！」

ケリイの呼び掛けにも反応はなく、コントロールを失った機体は、力が抜けたように落下しはじめる

「カレン！目を覚ませ！」

「このままじゃ海面に激突します！」

「カレン！」

どんどん海面が近づいてくる

ダメかと思った瞬間、突然コントロールが戻り海面までわずかのところで機体を起こした

すぐさまケリイが隣に機体を寄せる

「カレン！気が付いたか！？」

だが無線から言葉が返ってこない、無言のままだ

ケリイがコクピットをよく見ると、カレンは首がガクンと下がったまま気絶しているが、操縦桿は動いている

エグザイルには、ヘルメットのセンサーで脳波を読み取りパイロッ

トに異常が発生した場合、自動操縦による回避行動に移る機能がある

「自動操縦？」

「ああ　ひとまず落ちることはなさそうだ」

カレンを守るように、ケリイは隣を離れない
そこへ通信が入った

『連合軍ナラビニ、エグザイルノ諸君、無駄ナ事ハヤメタ方ガイイ』

「ルドラ……」

『オマエ達ノ兵器デハ、シールドヲ破壊スル事ハ出来ナイ　モウ十分ワカタダロウ？』

いっこうにシールドが破れる気配はない

リーベンハルトの部隊も徐々に押され始めている

「このデカブツが！」

カレン機が安全な距離まで離れると、ケリイは巨大兵器の方を睨みつけ向かって行った

「ケリイ！まだシールドが消えてない！」

グリムが引き止めるのも聞かず、火器管制を通常攻撃からマルチロックへ切り替える

向かってくる何本もの光の矢を躲しながら、射程距離内に捉えた

「届けー！」

ミサイルが一固まりになって突き進む

途中、複数ロックした砲台に向けて分かれていく

『無駄ダ！シールドガアル限り効カン！』

絶え間なく続いていた砲撃が止んだ

砲台は爆発し跡形もなく、炎と黒煙が上がっている

『馬鹿ナ！？』

空高く昇るこの黒煙は、グリム達の反撃の狼煙となった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1692a/>

ソラノカケラ

2010年10月9日22時56分発行